

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720175

研究課題名（和文） 室町期京都の幕府 寺社権力と祭礼

研究課題名（英文） The relations between the Ashikaga shogunate and the temples and shrines, and a festival

研究代表者

三枝 暁子（MIEDA AKIKO）

立命館大学・文学部・講師

研究者番号：70411139

研究成果の概要：室町期京都の権力構造を明らかにするため、比叡山延暦寺（山門）と、その末社である祇園社（八坂神社）・北野社（北野天満宮）の京都支配の構造、および三寺社と室町幕府との関係、について解明した。その際、寺社と幕府との関係を探る重要な素材として祭礼に注目し、室町期の北野社（北野天満宮）の祭礼について取り上げ、考察をすすめた。具体的には南北朝期における幕府の北野祭の再編と北野社西京神人の存在形態、あるいは神社において「神人」を統率する位置にある、「公人」について検討した。さらに中世の「北野祭」の名残りをとどめる、現在の「瑞饋祭（ずいきまつり）」について調査を行い、成果をまとめた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,700,000	0	1,700,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	240,000	3,840,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：室町幕府、比叡山延暦寺、北野社、北野祭、祇園社、祇園祭

1. 研究開始当初の背景

1960年代後半に黒田俊雄氏によって、中世国家が公家・武家・寺社という三つの権力機構（「権門」）を基盤として成り立ち、三者が拮抗しあいながら一つの国家体制を支えていたとする「権門体制論」が提唱されて以後、

日本の中世史学界はこの「権門体制論」をどのように継承し発展させてゆくのか、或いはどのように批判し、これに代わる新たな論理を打ち立てるのか、ということの一つの課題としてきた。とりわけ公家・武家・寺社の三つが出揃い拮抗しあった南北朝期～室町期

の京都が、いかなる権力構造のもとにあったか追究していくことは、権門体制論の是非をめぐる議論において、大きな鍵となりうるものである。しかしながら、室町期の政権論は、「公武関係」論を基軸に展開されており、武家と寺社との関係に着目する傾向はあまりみられない。そこで室町幕府と寺社との関係を探る必要があるのではないかと考え、両者をつなぐ場として祭礼に注目し、研究を進めることにした。その際、特に、日本中世の寺社権門を代表する位置にある比叡山延暦寺と室町幕府との関係に着目したいと考えた。

2. 研究の目的

室町期における権門体制のありようを明らかにするため、具体的には祭礼と祈禱を基軸とする、幕府と寺社との関係について分析をすすめる。具体的には、比叡山延暦寺（山門）と、その末社である祇園社（八坂神社）・北野社（北野天満宮）の京都支配の構造、および三寺社と室町幕府との関係、祭礼・祈禱のありようについて解明していく。

延暦寺は白河上皇が「山法師」を天下三不如意の一つの数え上げたとされる伝承からも明らかのように、日本中世の一大政治勢力であった。南北朝動乱を契機に鎌倉から上ってきた武家足利氏が京都に確固たる政権基盤を築くためには、延暦寺につらなる勢力をいかに統制・支配するかが大きな課題であった。その統制・支配の実像は、足利將軍の手になる日記が存在せず、また延暦寺が織田信長の焼き討ちにより大半の古代・中世の史料を失っているという状況から、実は末社祇園社・北野社の所蔵史料からもっとも詳しく探ることができる。

すでに祇園社研究を通じて、南北朝期の足利將軍家が祈禱を媒介として祇園社僧と接近し、本寺延暦寺の影響下にあった祇園社を

自らの支配下に納める過程を明らかにしている。そこで、先行研究において北野社と足利將軍家の関係も非常に密接であったことが指摘されていることを受け、北野社に注目し、足利將軍家とのつながりが、北野社の組織や社領支配のあり方に、どのような影響を与えているのか、という点について考察したい。

その際特に注目したいのが、北野社の支配を受け北野社の膝下領である京都西京に居住した西京神人（にしきょうじにん）の動向である。西京神人は、西京に居住し麴製造を行っていた商人が北野社に組織されたもので、中世を通じその活動がもっとも活発化したのはまさに室町幕府確立期であった。ここで西京神人に注目する理由は、次の2点による。

- (1)室町期における西京神人の台頭の背景に、幕府の神社政策ともう一つ、京都における祭礼復興策が深く関わっていたと考えられこと。
- (2)室町期西京神人の子孫の家が現在も西京の地に複数のこり、固有の文書と伝承を伝えていること。

(1)については、同じ室町幕府確立期、延暦寺の日吉小五月会、そして祇園社の祇園会が、幕府の編み出した新たな経営方式のもとで復興していることを考慮し、北野祭の経営方式について探ることを意味する。また(2)については、西京神人家が今も存在する事実そのものが、中世史研究者の間ですら知られていない実情がある。そこで神人家の所蔵文書や伝承の内容について研究者にひろく知らせ、また史料・伝承を後世によりよい状態で伝えていくことにしたい。

以上のことから、本研究では、北野祭及び西京神人の歴史を分析することにより、室町期の北野社と室町幕府との関係を明確にし、そ

れが従来の延暦寺・祇園社研究、室町幕府研究とどのように関係しあうのか意味づけ、室町期京都の寺社権力と武家権力の関係を解明することとしたい。さらに西京神人家の調査を通じ、中世に由緒を持つ家が現代においても存続する意義や、それを可能にする京都という場の特殊性についても検討したい。

そうした検討によって予想される結果と意義については、以下の3点が考えられる。

(1)祭礼研究の重要性...北野祭の内容と運営方式は、日吉小五月会や祇園会と同様、室町幕府の成立により大きく変質していることが予想され、そこに室町幕府の寺社政策や経済政策を読み取ることが可能となろう。その結果、稲荷祭や松尾祭など、京都の祭礼一般についての研究が活発化し、また幕府や寺社など権力者にとっての祭礼の意義ばかりでなく、民衆にとっての祭礼の意義、及び現代をも視野に入れた祭礼を核とする都市共同体の研究の見直しも進むものと思う。

(2)地域研究および京都論の重要性...西京神人について解明することは、そのまま一条通から三条通までの広がりを持つ西京地域の歴史の解明につながる。西京神人家を訪問し、聞き取り調査及び文書調査を進めることによって、近世以前の西京の景観や居住形態、或いは信仰のあり方など多くのことが明らかになるものと思う。そうした事実の解明が、神人家にのこる史料・伝承の保存の重要性を多くの人々に知ってもらう上で意味を持つとともに、前近代から続く家や史料・伝承がのこる京都という地の特質を、改めて前近代都市論という枠組みから捉えなおす動向を学界で生み出す契機になるものと思う。

(3)中世北野祭についての専論は管見の限り存在せず、従来から祇園会研究が活発であるのと対照的である。近年下坂守氏が「延暦寺大衆と日吉小五月会(その一)・(その二)」(同

氏『中世寺院社会の研究』思文閣出版、2001年、231～306頁)で明らかにされた日吉小五月会の研究や、河内将芳氏が「室町期祇園会に関する一考察」(『ヒストリア』2004年9月、第191号、1～27頁)で明らかにされた祇園会研究の手法をとりこみつつ、北野祭の研究をすすめるならば、その実態ばかりでなく、延暦寺及びその末社の祭礼が室町幕府政権下にどのような変質をとげたのかをより鮮明に明らかにすることができる。その変質の背景については、拙稿「南北朝期京都における領域確定の構造 祇園社を例として」(『日本史研究』2001年9月、第469号、1～34頁)がヒントになるものと思う。また西京神人の研究については、戦前、小野晃嗣氏が「北野鞠座に就きて」(『国史学』1932年5月、第11号、1～27頁)を発表されて以降進展していない。未公表の神人家文書の調査によって、さらに西京神人論を発展させていくことができるものと思う。

3. 研究の方法

(1)基本的な視角として、従来の研究が、寺社論・都市論・室町幕府論として、全く別個の問題として扱ってきた事象を、京都という中世日本の首都ともいえる都市空間において統合的に捉えることに重点をおく。

(2)足利將軍の手になる日記が存在せず、また延暦寺が織田信長の焼き討ちにより大半の古代・中世の史料を失っているという現状をふまえ、遠回りではあるが、北野社の史料を丹念に読み解くことにより、北野社のみならず足利將軍家や本寺延暦寺の動向をも積極的につかんでいくことにつとめる。

(3)京都に勤務しているという地の利を最大限に活かしながら、北野天満宮・西京神人家など、研究対象地域のフィールドワーク、史料調査を積極的に行う。

4. 研究成果

(1)研究成果を以下7つの学術論文・書評にまとめた。

室町期の北野社(北野天満宮)の祭礼がどのように運営されていたのか、それ以前の運営形態と比較しながら考察し、論文「北野祭と室町幕府」としてまとめ、五味文彦・菊地大樹編『中世寺社の都市・権力』(山川出版社、2007年4月)に掲載された。

上記の北野祭で祭礼費用を負担した、北野社西京神人の存在形態について分析し、論文「神人」としてまとめ、吉田伸之編『シリーズ身分的周縁と近世社会6・寺社をささえる人びと』吉川弘文館、2007年5月、に掲載された。

神社組織において、祭礼費用を負担する神人を統率する位置にあった、公人について考察し、「中世寺社の公人について」という論文を『部落問題研究』181号(2007年6月)に発表した。

北野祭が廃絶した後の北野社周辺の町の様相を、論文「秀吉の京都改造と北野社」としてまとめ、『立命館文学』605号(2008年3月)に発表した。

中世祇園祭研究をリードしている河内将芳氏の著書『中世京都の都市と宗教』(思文閣出版、2006年)の書評を、『史学雑誌』第116編第6号(2007年)に発表した。

北野祭が中絶して以後の、西京の共同体的ありようを、豊臣秀吉が京都に築造した「お土居」の問題とからめ、考察し、原稿にまとめた(2009年度中に出版される予定のシリーズ伝統都市『都市イデア』東京大学出版会、に掲載予定)。その結果、室町期の祭礼組織が「お土居」によって洛中洛外に分断される状況を明らかにすることができた。

室町幕府と同様に北野祭を統御しうる存在であった北野社の本寺比叡山延暦寺(山門)

の大衆について研究した。具体的には、室町期の大衆が、山内はもとより、北野社などの末社や室町幕府に対して意思表示する際に発給した「集会事書」とよばれる史料について検討し、その成果を「中世における山門集会の特質とその変遷」(村井章介編『人のつながりの中世』山川出版社、2008年)にまとめた。

(2)室町期の「北野祭」の名残をとどめる現在の「瑞饋祭(ずいきまつり)」で巡幸する、農作物でつくられる御神輿「瑞饋神輿(ずいきみこし)」の製作過程を、「西之京瑞饋神輿保存会」の協力によって調査し、その成果を、以下のように発表した。

報告書「ずいきみこし」(中西印刷、2007年3月)

「祇園祭と北野祭」(立命館大学京都文化講座 京都に学ぶ 『京の色彩(いづいどり)』白川書院、2009年5月、2009年3月脱稿)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

三枝暁子、「秀吉の京都改造と北野社」、『立命館文学』第605号、110~126頁、2008年、査読有

三枝暁子、「中世寺社の公人について」、『部落問題研究』、第181号、37~60頁、2007年、査読無

三枝暁子、書評：河内将芳著『中世京都の都市と宗教』、『史学雑誌』、第116編第6号、65~74頁、2007年、査読有

[図書](計3件)

村井章介編、山川出版社『人のつながりの中世』2008年所収、三枝暁子「中世における山門集会の特質とその変遷」(40頁)

吉田伸之編、吉川弘文館『シリーズ身分的
周縁と近世社会 6・寺社をささえる人びと』
2007年所収、三枝暁子「神人」(33頁)

五味文彦・菊地大樹編、山川出版社『中世
寺社の都市・権力』2007年所収、三枝暁子「北
野祭と室町幕府」(34頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三枝暁子 (MIEDA AKIKO)
立命館大学文学部・准教授
研究者番号：70411139

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし